

科学理解の問題としての「超能力」現象*

佐野正博

| | |
|---|---|
| はじめに | 1 |
| 1 「超能力」現象は自然現象である？！ | 1 |
| 2 自分の眼で見たことを素直に信じるべきである？！ | 2 |
| 3 科学的な実験をやってもみずに頭からインチキだときめてかかる態度は非科学的である？！ | 2 |
| 4 超能力は現代科学と矛盾するから存在しない？！ | 3 |
| 5 超能力問題に対してもまったく先入観を持たずに白紙の状態でのぞむのが科学的態度である？！ | 3 |
| 6 超能力はきまぐれな能力である？！ | 4 |
| 7 超能力主義者も数多くのデータによる証明を求めている？！ | 4 |
| 8 科学的に解明しようとする超能力は自ら身を隠してしまう？！ | 5 |
| おわりに | 5 |
| 超能力問題を考えるための参考文献 | 6 |

* 本原稿の初出は、佐野正博(1994)「科学理解の問題としての「超能力」現象」『日本の科学者』1994年12月号, pp.700-704である。デジタル化に際して、表記の一部を変更するとともに、別稿の「＜文献紹介＞超能力問題を考えるための参考文献」と一体化した。

はじめに

超能力の存在を信じている人の数は、各種のアンケートに示されているようになり多い。こうした傾向は、理科が苦手だというような人々の間だけではなく、科学教育をかなりの期間にわたって受けてきているはずの理科系の大学生の間でもあまり変わらない。

実際、東京理科大学工学部で筆者の授業を受講している学生に対して今年の9月に実施したアンケートでは、「スプーン曲げなどの念力が存在すると思う」と答えた者が196名中62名と約3割も存在する。「どちらとも言えない」と答えた者も44名おり、「存在しないと思う」と答えた者は90名と半分以下にとどまっている。

超能力を信じるのは非科学的だと多数の科学者が考えているにも関わらず、超能力を信じる者が理科系大学生の間でもこのようになり多いということは何を意味するのだろうか。

通常科学者の考えとは異なり、超能力の存在を信じることと科学的思考は両立可能なのだろうか。超能力の存在を信じている人々は、科学性の規定をどのように考えているのだろうか。そもそもそうした人々は超能力の存在をどのように正当化しているのだろうか。

こうした問題の考察のために、超能力を科学的に研究することが可能だと考えている超心理学者の主張をまず最初に取り上げることしよう。

1 「超能力」現象は自然現象である？！

19世紀の心霊術師も20世紀の超能力者も透視(千里眼)や念力や予知など同じようなことを行っている。しかしながら心霊術師と超能力者、霊能力と超能力というような言葉の間には意味のズレがある。このズレは超能力現象の存在性格に関する二種類の立場すなわち宗教的立場と「科学的」立場の差異に対応している。

宗教的立場では、心霊現象と超能力現象との間に明確な本質的区別が設定されるわけではなく、

どちらも自然科学で取り扱うことのできない超自然的現象であるという意味で超常現象であるとされる。

これに対して「科学的」立場では、超能力現象は心霊現象とは異なり自然現象だとされる。超能力現象は、火の玉現象と同じく、現在のところ非日常的であり滅多に起こらないという意味で超常現象であるに過ぎない。それゆえ自然現象を扱う自然科学として超心理学が成立する、とされる。

例えば、大学というアカデミックな体制の中で超能力を研究することをうたった最初の研究機関であるデューク大学超心理学研究所において1940年から65年まで所長を勤め、parapsychology(超心理学)という言葉の創造者としても有名なラインは、超能力を自然現象として科学的に研究する学問として超心理学を位置づけており、統計学的手法を用いて超能力の存在を科学的に証明しようと熱意を燃やしていた。

日本の超心理学者の一部もラインと同じように超能力現象に対する宗教的立場と「科学的」立場との矛盾を強く意識している。例えば、大谷宗司氏は日本において超心理学がなかなか軌道に乗らなかった原因の一つとして「心霊主義的運動と超心理学の混同による超心理学を非科学的とする誤解」¹⁾を挙げるとともに、自らが現在の日本超心理学会へと続く新たな研究会を作って超自然科学研究会を離れたのは「その会が旧来の心霊主義的色彩を払拭しきれず、また宗教的興味や通俗的傾向をもふくみもつようになったため、純粋な学術的研究の団体の必要を感じたからであります」²⁾というように超心理学は科学的立場に立つ超能力研究であると強調している。

また金沢元基氏も、「化学が錬金術から分かれて科学となったように、超心理学も昔は心霊主義とは無縁な存在ではなかった」が、「現在ではそれとはまったく縁がない科学となり、結局、その立場から、心霊主義のいろいろな霊媒を中心とする現象や宗教的信条を基にしたやり方に対して非常に批判的」³⁾だとしている。

このように、少なくとも一部の超心理学者は超

能力を自然現象と考え科学的に研究しようとしていると主張している。しかしそもそも超能力は本当に存在するのだろうか。

2 自分の眼で見たことを素直に信じるべきである？！

超能力現象が超自然現象であるにせよ自然現象であるにせよどちらにしても、テレビにおけるスプーン曲げの念力「実験」のように、一見したところ超能力と思われるような現象が存在することは疑いようがない。

超能力の存在をめぐる対立はそうした事態の解釈にある。超能力の存在を信じる人々(以下、超能力主義者と記す)の多くはそのことを超能力の存在証明であると素直に解釈するのに対して、超能力が存在しないと考えている人々(以下、反超能力主義者と記す)はそれが手品などと同じように何らかのトリックによる現象であるというように懐疑的に解釈する。

反超能力主義者によれば、ある人が眼の前でスプーン曲げをやって見せたとしても、そのことがただちに超能力の存在証明になるわけではない。スプーンが曲ったのは、超能力によるのかもしれないし、トリックによるのかもしれない。そのどちらであるかの厳密な科学的判定は、そのプロセスを詳しく調べて綿密に検討することによってしか得られない。

このように超能力現象の存在をめぐる対立はまず一次的にはデータの科学性をめぐる争いである。ある現象の存在をめぐる判定基準のレベルが通常の科学者と超能力主義者(一部の超心理学者を除く)の間ではかなりズレているのである。

通常科学者によれば、現代科学の常識的見解に反すると思われる現象が存在するかどうかを科学的に判定するためには、常温核融合現象の場合がそうであるように、再現可能性とともに、その実験プロセス自体に関する厳密な科学的検討が必要不可欠である。インチキやトリックといった意図的不正だけでなく、意図しない無意識の間違い

にまで細かく気を配ることが必要である。実験が行なわれた諸条件がはっきりしないデータでは存在を科学的に確認するのに十分ではない。

「百聞は一見にしかず」であるにしても、その存在が疑問視されている現象に関して「自分が実際に体験したこと」や「自分が眼で見たこと」を何らの疑問も持たずに素直に解釈しありのままに信じることは科学的であるとは言えない。眼に見えないのは超能力の作用メカニズムだけではない。隠されたトリックや無意識の間違いもなかなか眼には見えないのである。

3 科学的な実験をやってもみずに頭からインチキだときめてかかる態度は非科学的である？！

超能力問題の取り扱いの難しさは、存在を決定的に証明するような科学的データがまだないということとともに、超能力が存在しないことの決定的証明が困難であるということにある。

「球形の立方体」や「丸い三角形」というような論理的な矛盾を含むものであれば、そうしたものが存在しえないことを論理的に証明することが可能であり、正常な人間であれば誰もそうしたものが存在するなどとは主張しないであろう。

しかしそうした論理的矛盾を含まないような現象や対象の非在証明は、ポリウオーター事件⁴⁾や常温核融合事件に示されているように極めて困難である。

その限りにおいて、「超常現象が存在しないということは今のところはっきりと完全に証明されたわけではない。科学的な実験もやってみないで、頭からインチキだときめてかかる態度は非科学的である」というような一部の超能力主義者の主張にも理がないわけではない。

しかしながら、超能力現象が存在しないことの決定的証明が未だないと仮に認めたとしても、そのことは超能力現象の存在証明があるということの意味するわけではない。科学的な実験をまったくやってみないで頭からインチキだときめてかか

る態度は確かに非科学的である。ただそれと同じく、科学的な実験もやってみないで頭から存在するときめてかかる態度も非科学的なのである。

4 超能力は現代科学と矛盾するから存在しない？！

さてここで科学者の中には、「超能力現象に対する科学的実験など必要ない。超能力は現代科学と矛盾するものであり存在しないことは科学的に明白ではないか。」と考える人も多いであろう。

確かに大槻義彦氏が指摘しているように、エネルギー励起型超常現象としての超能力はエネルギー保存則など現代物理学の基本原則に反すると思われる。⁵⁾それゆえ、数多くのさまざまな場面で確認されている現代物理学の基本原則に反した超能力なるものは存在しえない、と考える方が合理的なのではないか。

こうした主張に対して、超能力主義者たちはどう考えているのであろうか。彼らも超能力の存在を主張することは現代科学の否定につながると認めている。しかし彼らは通常の科学者とは逆に、だからこそ自らの主張に意義があると考えている。彼らによれば、超能力の存在を示唆するいくつかの実験データは現代科学の崩壊の予兆を示している。望遠鏡によるガリレオの観察データと同じように、超心理学者たちの実験データは多くの人々が正しいと信じている知的権威である現代科学の誤りを示唆している、と考えているのである。

このように超能力主義者の多くは、長年にわたって正しいと信じられてきたアリストテレス自然学という伝統的権威に対して戦ったガリレオに自らを重ねあわせている。現代科学の伝統的観念からすれば自分たちの主張は確かに信じ難いものであるが、それでも真理は自分たちの側にある、というのである。

この問題を論理的レベルで抽象的に考える限りにおいては単なる「水かけ論」である。反超能力主義者の主張にも形式論理的にはそれなりの根拠がある。数多くの経験的確認データを持つ現代物

理学に反するから超能力は存在しないと断定することは、確かにもっともなことではあるが、形式論理的には必ずしも正当とは言えない。

これと同様の問題に永久機関がある。永久機関が存在し得ないことは、19世紀に確立したエネルギー保存則などの熱力学によって理論的に証明されている。エネルギー保存則に対する見かけ上の反証はニールス・ボーアのような一流科学者の主張も含めて歴史的にさまざまな形で存在したが、そうした見かけ上の反証の誤りが明らかにされる過程を通じて、エネルギー保存則に対する社会的確信は次第に強固になり、それとともに永久機関は不可能だと社会的に考えられるようになった。

ただこのことは永久機関が絶対に存在し得ないことのないことの理論科学的証明ではあっても、論理的証明ではない。単なる形式的論理としては、永久機関が将来実際に製作されて、エネルギー保存則の誤りが証明される可能性もゼロではない。ニュートン力学の自明の前提であった質量保存則の破れが特殊相対性理論の登場とともに質量とエネルギーの相互転化という形で実際に見いだされたように、エネルギー保存則の破れが将来的には発見されるようになることがないとは論理的には言えない。

このような観点からすれば、科学がどんなに進歩しても現在の基本原則が破れることが将来にわたって絶対にないとは必ずしも言えない。そういう意味で、現代科学が誤っており超能力が存在する形式論理的可能性もゼロではない。また高温超伝導現象のように理論的にはありそうにない多くの科学者が考えていた現象が発見されることもある。科学において一次的なのは、経験であって理論ではないのである。

5 超能力問題に対してもまったく先入観を持たずに白紙の状態でのぞむのが科学的態度である？！

ではこうしたことから考えると、「まったくの白紙の状態」、どちらにもまったく荷担しない完

全に中立の立場に立って現代日本の「超能力」問題に対処するのが合理的なのだろうか。

ことはそんなに単純ではない。というのも、超能力現象に関するテストがこれまでまったく行なわれてこなかったわけではない。それどころかトリックによる超能力現象は19世紀の時代から今日に至るまで奇術師や科学者によって数多く暴露され続けてきている。そしてまた奇術師は見たところ超能力者とまったく同じ現象を手品として演じている。

こうした状況を考慮すると超能力が存在するかどうかをめぐる拳証責任は、超能力が存在しないと主張している側ではなく、超能力が存在すると主張している側にまず第一に帰することは明白である。

事態は前述の永久機関の場合とちょうどまた同じなのである。永久機関が存在するという主張は現代科学の見地から見てきわめて疑わしい。それゆえ永久機関の特許申請に対しては設計図とともに実際に動く試作品を求めると合理的だと考えられている。すなわち、「とにもかくにも実際に動く永久機関を現実に製作せよ、科学的検討はその後だ」とされている。

それと同じように、現代科学の見地から見てその存在がきわめて疑わしい超能力が存在すると主張するのであれば、そのことをきちんと科学的に証明することがまず第一に求められるべきなのである。それにも関わらず現代日本のマスコミの現状ではその逆に、超能力が存在しないことの科学的証明がまず先に求められている。

6 超能力はきまぐれな能力である？！

しかし前にも述べたように、超能力が絶対に存在しないことの証明はきわめて難しい。いく人かのインチキやトリックを暴いたとしても、まだ科学的テストを受けていない人の中に本物の超能力者が存在するかもしれない、という形式的可能性は常に残る。ある超能力者に対する科学的実験の結果が否定的であったことは、超能力の存在に対

する反証ではなく、その被験者が超能力者ではなかったことの証明にしかならない。

しかも超能力主義者に対する反=超能力主義者の戦いにはさらなる困難が付きまといっている。ある被験者に対するいくつかの実験結果が否定的であったからといって、その被験者が超能力者でないことが証明されたことには必ずしもならないのである。

超能力主義者によれば、一人の被験者が常に肯定的実験結果を示すわけではないということは、超能力の非在の証明ではなく、超能力の気まぐれさの証明にしかならない。超能力はうまく発揮される場合もあればそうでない場合もあるというような気まぐれな能力なのである。

超能力の科学的解明が本当に可能であれば追求したいと考えている人は少なからずいると思われる。しかしそうした善意の人に対しても、超能力現象を研究するための壁はこのようにきわめて高い。今までのところ超能力現象には再現可能性が欠けているのである。

7 超能力主義者も数多くのデータによる証明を求めている？！

超能力主義者の中にも、再現可能性が超能力の科学的な存在証明に必要な不可欠であることを理解している人はかなりいる。そうした人々は超能力の存在証明において通常の科学的基準と近いものを科学者と共有しており、数多くの肯定的データを集めるべきだと考えている。

例えばロンドン心霊研究協会(SPR)の初代会長シジウィックは、「磨き抜かれた知性を持ち、それまで一度たりとも疑いをかけられたことのない研究者が行なった決定的実験を5、6件見せられてもまだ折れないようなら、他の研究者が証言している実験をさらに5、6件掲示するようにしましょう。もし10件以上見せても効果がないようなら、20件まで増やしましょう。もしそれでもだめなら、50件にしようではありませんか。」⁶⁾というようにSPRの会員に向けて講演し

ている。そして超心理学の研究はそうした方向に沿って行われ、ラインも「超心理学の立場は実験的証拠を全面的にその基盤としている」と自負している。⁷⁾実際、1100人以上の被験者を対象として25万回以上の試行実験を行なった超心理学者も中にはいる。

8 科学的に解明しようとする超能力は自ら身を隠してしまう？！

ただそれに関わらず、超能力の存在を明白に示すデータは必ずしも数多くは集まっていない。そのことはエジンバラ大学心理学部超心理学研究室室長のペロフでさえも認め、「現在よりもはるかに高度の再現性が達成できない限り、実験によって得られた結果は、少なくともひとり以上の実験者の不注意によるものか、意識的無意識的な不正によるものである可能性が残る、とする懐疑的な見方が成立するし、しかもそのような見方をとるのは正当なのである。」⁸⁾と述べている。金沢元基氏など日本の超心理学者の一部も同様のことを述べている。⁹⁾

そのような状況のため、超能力の存在を信じているアーサー・ケストラーでさえも、再現可能性を追求する方向での超心理学研究があまり順調には発展できず袋小路に追い込まれてしまっていると認めている。¹⁰⁾

そのため一部の超能力主義者は、「とらえにくさ」が超能力現象の本質的特徴であり、超能力現象に対して科学的なテストを行なおうとすると現象が減衰ないし消滅するというような後退的な弁明までするようになっていく。

例えば、パチェルダは「浮揚中の物体を撮影しようとするときカメラが「攻撃」され叩き落とされるか、奇妙な故障を起こす」として、超能力は「追いつめられる」と、記録装置を使いものにならなくしてその支配から逃れることを「決意」するように見える¹¹⁾と主張している。

おわりに

超能力が本当に存在するのかわかるとめぐり論争において、超能力現象の再現可能性が極めて低いという問題は超能力の存在を信じている人びとのアキレスの踵となっている。

この問題に対する超能力主義者の弁明は、山羊-羊効果などによる擁護論のように、あまり合理的とは言えないだけでなく、非=科学的ですらあるものもある。超能力現象の存在を擁護しようとする人びとの中には、超能力現象に対する科学的探求を放棄し、宗教的立場に傾斜している人びとも多いと言わざるを得ない。

注

- 1) 大谷宗司編『超心理の科学』図書出版社、1986年、p.13
- 2) 同上書、p.23
- 3) 同上書、p.74
- 4) 井山弘幸「「非在証明」としてのポリウォーター事件」『科学と非科学のあいだ』木鐸社、1987年
- 5) 大槻義彦『超能力ははたしてあるか 科学 vs 超能力』講談社ブルーバックス、1993年
- 6) 笠原敏雄編『サイの戦場 - - - 超心理学論争史』平凡社、1987年、p.430 [同書のpp.631-637に超能力現象に関わる用語の簡便な説明があり、便利である]
- 7) 同上書、p.144
- 8) 同上書、p.521
- 9) 大谷宗司編、同上書、pp.75-76
- 10) ジョン・ペロフ編『パラサイコロジー』工作舎、1986年、p.4およびp.7
- 11) 笠原敏雄編、前掲書、p.579

超能力問題を考えるための参考文献 Bibliography for psi problem

佐野 正博

超能力現象は19世紀には心霊術師の心霊現象として登場し、クルックスやバレットやロジなど少なからぬ科学者による信奉者として巻き込むほど心霊術は社会的に流行した。

そうした心霊術に対する19世紀における批判としては、**ファラデー**（**秦一夫**訳）『**コックリさんの実験的研究**」[ものの見方考え方研究会編『ものの見方考え方 第2集 手品・トリック・超能力』季節社,1981年所収]や**エンゲルス**『**心霊界の自然科学**」[『自然弁証法』所収]などがある。

また19世紀心霊術や心霊主義に関する詳細な歴史的研究としては、心霊主義とキリスト教との関係、心霊主義とダーウィンなど19世紀科学者の関わりなどを分析した**J. オッペンハイム**（**和田芳久**訳）『**英国心霊主義の抬頭**』工作舎,1992年がおもしろい。

20世紀になると、超能力を科学的に研究しているとする超心理学が登場する。そうした超心理学研究およびその歴史の概観には、**大谷宗司**編『**超心理の科学**』図書出版社,1986年や『**imago**』第3号,特集『**超心理と気の科学**』,青土社,1990年が便利である。

超心理学に対する賛成派と反対派の論文を収録したものとしては、賛成派の立場からの編集ではあるが**笠原敏雄**編『**サイの戦場……超心理学論争全史**』平凡社,1987年が便利である。また超能力現象の本質的とらえにくさという超能力主義者の後退的な主張など最近の超心理学研究の動向を見るには、**笠原敏雄**編『**超常現象のとらえにくさ**』春秋社,1993年がままとまっている。（なおこれら2冊の本の巻末には超心理学に関する外国の文献まで含めたきわめて詳しい参考文献一覧表がついており、超能力問題を専門的に研究しようとする人には役立つ。）

欧米における超心理学の実験的研究を知るには**ジョン・ベロフ**編（**井村宏次**、**岩本道人**、**鈴木孝彦**訳）『**パラサイコロジー**』工作舎,1986年が、超能力も含め様々な超常現象に関わる肯定派の主張や用語を知るには**リン・ピクネット**（**関口篤**訳）『**超常現象の事典**』青土社,1994年が便利である。

超能力のトリックや手口などを論じながら、超能力に対する現代的批判を展開したものとしては、**ものの見方考え方研究会**編『**ものの見方考え方 第2集 手品・トリック・超能力**』季節社,1981年、**安齋郁郎**『**「超能力」を科学する**』かもがわ出版,1990年、**安齋郁郎**『**超能力ふしぎ大研究**』労働旬報社,1993年、**安齋郁郎**『**超常現象の科学**』ごま書房,1994年、**呉智英**監修（**安齋郁郎**ほか執筆）『**オカルト徹底批判**』朝日新聞社,1994年、**大槻義彦**『**超能力ははたしてあるか 科学 v**

s 超能力』講談社ブルーバックス,1993年、**大槻義彦**『**超能力・霊能力解明マニュアル**』筑摩書房,1994年などがおもしろい。

超能力のカラクリを見破ることにかけては科学者はあまり向かず手品師が優れている。手品師としての立場から超能力のトリックのタネを詳しく論じたものに、**坂本種芳**・**坂本圭史**『**超能力現象のカラクリ**』東京堂出版,1990年（日本文芸社から1975年に出版されていたものの新装改訂版）、**石川雅章**『**超能力の謎**』広済堂,1977年、**松田道広**『**超能力のトリック**』講談社現代新書,1985年などがある。また超能力を信じる立場からではあるが、**ミスター・マリック**の超能力トリックのタネを詳細に暴露したものに、**ゆうむはじめ**氏の一連の著作『**Mr.マリック 超魔術の嘘**』、『**Mr.マリック 超魔術の嘘・再び**』、『**Mr.マリック 超魔術の嘘・実践編**』（いずれも**データ・ハウス**社刊）がある。

超能力現象は新興宗教では霊能力による宗教的奇跡として信仰の強化のためによく利用されている。日本の新興宗教におけるそうした超能力問題を批判的に論じたものに、**段勲**『**「超能力」宗教・その謎と正体**』あつぷる,1988年、**柿田睦夫**・**藤田文**『**霊・超能力と自己啓発**』新日本新書,1991年がある。

また超能力問題は、科学と疑似科学を区別する基準の問題でもある。「科学とは何か」という観点から超能力問題を科学的見地から論じたものに**板倉聖宣**『**科学的とはどういうことか**』仮説社,1977年や**下坂英ほか**編『**科学と非科学のあいだ**』木鐸社,1987年が、科学社会学的見地から論じたものに**H・M・コリンズ**、**T・J・ピンチ**（**佐野正博**訳）『**超心理学は科学か?**』『**排除される知……社会的に認知されない科学**』青土社,1986年がある。

また超常現象としては、超能力のほかに幽霊やUFOなどがある。それらに対する現代的批判には、**中村希明**『**怪談の科学……幽霊はなぜ現われる**』講談社ブルーバックス、**中村希明**『**怪談の科学……PART**』講談社ブルーバックス、**新藤健一**『**映像のトリック**』講談社現代新書、**志水一夫**『**UFOの嘘**』データハウス社、**大槻義彦**『**UFO解明マニュアル**』筑摩書房,1992年がある。